

二〇二二年一月八日

齊粥庭のはこべら摘みて足す
風花のコロナ自肅の街に舞ふ
朝ごとに屋根の積雪確かむる
しずり雪枝撥ね鳥を翔たせけり
日だまりに鳩のふくらむ寒さかな
肩ならべ老い励ましつ七日粥

二〇二二年一月七日

蠟梅の大豆サイズに膨らみぬ
水涸れて地層の貝の息づかひ
母がりの目覚め七草たたく音
金槌で叩かれてをる鏡餅
くちびるに木の匙やさし若菜粥
福寿草小笹隠れに子沢山

二〇二二年一月六日

凧糸の弧の美しき初御空
獅子舞のあとを付きゆく中華街
礼者顔して窓に来る雀かな
裸木を翔ちては戻る群雀
池静か逆さ紅葉に色づきて
甲高き声の発矢と初稽古
セコイアの枯れて天地の柱なす

二〇二二年一月五日

淑気満つ千本鳥居通り抜け
初凧やおのころ島を遙かにし

むべ

もとこ

こすもす

音吉

凡士

小袖

せいじ

むべ

菜々

明日香

更紗

うつき

せいじ

智恵子

たか子

満天

やよい

素秀

むべ

凡士

たか子

寒禽の声透き通る神の杜

めし屋混む客は手に手に破魔矢持ち

探梅や歩き初む子に抜かれもし

二〇二二年一月四日

単線となりて始まる雪景色
リハビリの成果うべなひ去年今年
高枝に鴉もの見す冬木立
旅終へし安堵我家の雑煮食ぶ

二〇二二年一月三日

老の春夫の分まで生き抜かむ
大淀の風をはらみて凧揚る
コロナ禍やマスクの御慶な咎めそ
籠居の父と詣でる三日かな
共白髪なる偕老の祝箸
脈々と秩父連山初御空
まつさらな青空高く吾子の凧
初景色沖に孤高の島の影

二〇二二年一月二日

笛に舞ふ巫女あどけなき初神楽
退院を待ち侘ぶ部屋の初明かり
白息を吐きて叔父貴の土佐なまり
交番に日の差し込んで鏡餅
生かされてゐるを実感する初日

やよい

たか子

むべ

こすもす

やよい

せいじ

たか子

はく子

菜々

こすもす

なつき

宏虎

むべ

豊実

三刀

智恵子

やよい

素秀

凡士

むべ

凡士

むべ